

Nikolai Bogduk, Lance T. Twomey 著

四宮 謙一 訳

腰椎の臨床解剖

(B 5 変型 164 頁 3,605 円 (税込み) 1989 年 医学書院 刊)

小野 啓郎

(大阪大学医学部整形外科)

四宮さんの翻訳による「腰椎の臨床解剖」(Clinical Anatomy of the Lumbar Spine)は、確かに臨床家にとって魅力的な解剖書である。訳も正確で、しかも読みやすい。特徴を一言で言うとするれば、diagnosis-oriented anatomy と言えようか。腰痛の診断を念頭においた解剖といってもよい。

元来、解剖書というのは外科医の血汐に染まった手引書であった(ガレヌス・ベザリウスの例をあげるまでもなく)。「解体新書」もまた実地医家の焰の如き熱意の賜物であることは、人口に膾炙した事実である。その解剖書が面白くなった理由はどこにあるのだろう。多分、解剖学として整理され、骨・筋・神経・血管がそれぞれ無関係に、しかし一応系統だって詰めこまれるようになったのがきっかけであろう。解剖学教科書が解剖書を面白いはずがない代物にし

てしまったのである。瑣末主義の典型とでも言うべきドイツ学派解剖学は、内容こそ完璧であったものの、presentation のあり方は臨床家を遠ざけずにはいなかった。その対極にあるのが Arnold K. Henry の Extensile Exposure である。一見稚拙な挿絵ではあるが、外科医にとっては手離すことのできない解剖書として再版を重ねている。

この「腰椎の臨床解剖」は、腰椎の大まかな特徴、椎間板、椎間関節、靱帯、筋および筋膜、神経と血行の順に話を進めながら、その間に椎間板の生化学や生体力学の基礎知識が巧みに挿入されている。腰椎の痛みという章を起す前に、腰椎の発育や加齢変化の章が準備されているのも心憎い。最後に腰椎の病理解剖が簡単に紹介されている。

記述がとりわけ優れているのは

椎間関節と筋・筋膜の章であろうか。従来、腰痛といえば椎間板が主役にされがちであった。関節と筋・筋膜がやっと日の目を見る番になった感じがするが、これは著者の一人の Bogduk が manual medicine の専門家である所為もあろう。本当はマニプレーションの解剖学などさらに詳しく論じてもらいたいところである。

CT の普及以来、椎間関節の構造や向き、あるいは関節症変化が手に取るように描写されるようになった。筋肉の発達や萎縮についても有力な評価法が実用化されつつある。腰痛症候群の中でこれらの構造が見直されつつある現今の趨勢から見ても時宜を得た翻訳である。ただし、pedicle screw や biopsy needle を正確に椎体に刺入するガイドに役立てようと狙っている整形外科医にはこの解剖書は役に立たない。逆に腰痛を偏りのない目で見て、公平に判断し、適切に治療しようとする整形外科医には珍重されるに相違ない。生きた解剖学を、今度こそしっかり身に着けようと決心した研修医には絶好の解剖書である。